青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告［2012.3］
Ｇ１０－０１

小学校　道徳

自尊感情を高める道徳教育の指導の工夫
－ボランティア活動の体験を道徳の時間に効果的に生かす指導を通して－

八戸市立三条小学校　　教諭　　類　家　　直　人

要　　旨

本研究は，道徳の時間を要とした道徳教育において，自尊感情を高める指導の在り方を探ったものである。単元計画の中に，ボランティア活動を核とした複数の体験活動を組み込んだ。また体験活動につながる自作資料と，小集団による段階を踏んだ話合い活動を授業に取り入れた。その結果，自己有用感を抱き，自分のよさを認めるようになった。また，他者を思いやる気持ちをもつ児童や，互いのよさを認め合い，意欲的に自分の考えを発表する児童が増えた。

キーワード：小学校　道徳　自尊感情　他者理解　ボランティア活動

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」の中で，道徳教育の充実に関する主な改善事項の一つとして，「とりわけ、基本的な生活習慣や人としてしてはならないことなど社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識、自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどの道徳性を養うとともに、それらを基盤として、法やルールの意義やそれらを遵守することなどの意味を理解し、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることが大切である」と示している。つまり，人格の形成に必要な道徳性を養い，主体的に判断し適切に行動する人間の育成が求められている。中でも自尊感情は，特に重要な価値をもつ道徳性である。自分への信頼感や自信などの自尊感情の根幹は自分のよさを認めることにある。

平成22年度の全国学力・学習状況調査【小学校】の質問紙調査における質問（７）「自分には，よいところがあると思いますか」という質問項目において，全国と自身の学級の結果を比較してみると，自身の学級は自分のよさを認めている児童が多かった。しかし，実際の学校生活では主体的に活動できない消極的な児童が目立つ。その原因は，学級という集団の中での自尊感情が高まっていないからだと考えた。

そこで，道徳の時間を要とした道徳教育の指導において，ボランティア活動の体験を効果的に生かした学習指導を展開する。ボランティア活動は，互いに認め合えるような集団づくりと主体的に取り組もうとする意欲の土台となる。すなわち，学級という集団の中での自尊感情が培われるきっかけとなるものである。ボランティア活動を生かした道徳の授業によって，自尊感情が徐々に高まるものと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

道徳の時間を要とした道徳教育の指導において，互いのよさを認め合う集団の中で自尊感情を高めるためには，道徳的価値の自覚を促すボランティア活動を取り入れ，その体験を効果的に生かす自作資料を用いた話合い活動を行うことが有効であることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

道徳の時間を要とした道徳教育の指導において，次のような手だてを指導の中に取り入れることにより互いのよさを認め合う集団となり，さらにはその集団の人間関係の中で自尊感情が高められるであろう。

・ボランティア活動を核にし，複数の体験活動を意図的・計画的に取り入れる。
・他者理解を深め思いやりに対する考えを変化させるねらいをもった自作資料を作成する。
・小集団による段階を踏んだ話合い活動に，考えを書く場と表現意欲を喚起する手法を組み込む。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　研究における基本的な考え

諸富は，「自尊感情（セルフエスティーム）」を「自己肯定感の認識的側面」であると捉え，「自分のよさを自分で評価し，自分の価値を認識できる」ことと考えている。また，「他者や集団，社会とのつながりの中で，自分も役に立てる」，「人のため，社会のために自分にもできることがある」という気持ちが「自己有用感」であるとし，これを「自己肯定感の対人的・対社会的側面」であると考えている（諸富祥彦，2011）。

自尊感情は，自分のよさを実感することで育まれるが，それには他者からの受容が大きく影響する。このため，児童が互いに心通わせることのできる体験活動を充実させながら，道徳の授業で学んだことが実生活と関わり合っていることを意識化させる必要がある。

自身の学級における自尊感情の弱さの要因として，以下のような問題点があったのではないかと考えた。

・生活体験の浅さを補ったり，生活体験と結び付けたりする手だてが少ない。
・学んだ道徳的価値を具体的に発揮させる場が少ない。
・話合いを傍観的にしか聞いていない児童からは，学んだことを行おうという態度が生まれにくい。

そこで，自尊感情を高める上で，次の三つの手だてが有効であると考え，指導の計画と内容を見直した。

２　研究内容

(1) ボランティア活動について

小学校学習指導要領（平成20年３月告示，以下学習指導要領とする）では，「第３章　道徳　第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の３（２）において「集団宿泊活動やボランティア活動，自然体験活動などの体験活動を生かすなど，児童の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」と示されている。つまり，体験活動を効果的に生かす指導の工夫が求められている。

体験活動を取り入れただけでは，児童の道徳的実践力が高まるとは限らない。その体験活動を踏まえ，道徳の時間において道徳的価値の自覚を深める指導が必要である。そこで指導に当たっては表１のようにボランティア活動を核とした複数の体験活動を単元の中に意図的に組み込み，道徳の時間の前後に設定する。

ボランティア活動を積極的に行うこと，仲間のよさ・有り難さに気付き，認め合い，励まし合うことが自尊感情を高めることにつながると考えた。

表１　　単元計画（単元名「自分が好き仲間が好き」）

時	次	道徳の時間	体験活動	検証方法
10月上旬	第１次	ねらい　ありのままの自分を受け止め前向きに生きようとする心情を育てる。 資料名「花をさかせた水がめの話」 （学研４年「個性伸長」）	学級活動 「エンカウンター」	アンケート ワークシート
	第２次	ねらい　相手の立場を理解し信頼し助け合う態度を育てる。 資料名「オトちゃんルール」 （学研４年「友情・信頼」）	総合的な学習の時間 「高齢者疑似体験活動」	ワークシート
	第３次	ねらい　相手のことを思いやり相手のために努力する心情を育てる。 資料名「おじいさんの目」 （自作資料「思いやり・親切」）	総合的な学習 「ボランティア活動」	ワークシート 発　表 体験日記
11月上旬	第４次	ねらい　相手の気持ちを考え自分でできることを行おうとする態度を養う。 資料名「心と心のあく手」 （学研４年「思いやり・親切」）	学級活動 「こう言ってほしいな」	ワークシート アンケート

⑵ 自作資料について

学習指導要領では，「第３章　道徳　第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の３（３）において「先人の伝記，自然，伝統と文化，スポーツなどを題材とし，児童が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して，児童の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」と示されている。つまり，魅力的な教材の開発や活用を通した指導の工夫が求められている。

本単元の第３次では，児童の実態を踏まえ道徳的価値の自覚が深められるよう，自身の社会貢献活動を基にした自作資料を活用する。身体の不自由な高齢者が，自分の思いを伝えるために介護者をつねるという出来事が書かれている。資料の結末で高齢者が流す涙の意味と，最後に心を込めて「さようなら」を言った主人公の気持ちを考えさせ，他者を思いやることの意味を問いかけていく。

自分の存在は，誰かのための支えとなる力をもっている。しかし，それは他者を理解しようと努めた上に成り立つものである。この自作資料を活用することが他者理解を踏まえた自己有用感につながり，ひいては対人的・対社会的側面を帯びた自尊感情につながると考える。

⑶ 話合い活動について

学習指導要領では，「第３章　道徳　第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の３（４）において「自分の考えを基に，書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し，自分とは異なる考えに接する中で，自分の考えを深め，自らの成長を実感できるよう工夫すること」と示されている。つまり，他の人と関わり自分の考えを深められるような表現活動の工夫が求められている。

本学級は限られた児童の意見を中心に話合いが進められるため，価値の共有に時間がかかり，話し合ったことが具現化しにくい。そこで，次のような手だてで書くことと話合い活動を関係付けた。

・ワークシートに「思いやり」，「中心発問」，「振り返り」についての自分の考えを書かせる。
・中心発問について，始めは隣同士，次に班，その後，全体での話合いに広げる。

以上のような手だてを授業の流れに沿って整理したものが表２である。自分の考えと同じ意見が出されることで，自分の考えを肯定的に受け止めることができる。また，異なる意見に出会うことで，自分では思い付かないような見方に気付くことができる。意見を交流し全ての考えが肯定的に受け止められることで自尊感情が高まるものと考える。

表２　第３次の授業の流れ

	学　習　活　動
導入	１　身近な体験を想起させ，思いやりとは何かを発表する。（ワークシート，全員発表） ２　思いやりを一言でまとめる。（「～してあげること」）
展開	３　自作資料「おじいさんの目」を読む。 ①おじいさんにつねられた主人公の気持ちを発表する。（列・班指名）…補助発問 ②一言だけ「さよなら」と言った主人公の気持ちを発表する。（列・班指名）…補助発問 ③主人公の「さようなら」に込めた思いを話し合う。…中心発問 （ワークシート，隣同士・班・全体での話合い） ４　自分の思いが仲間に認められた体験を発表する。
終末	５　「思いやりとは○○な心である。」という文で始まる振り返りを書く。（ワークシート） ６　「思いやり」について考えたことを発表する。（列・班指名）

また，本学級の児童は，友達との考えのずれを気にし過ぎて，発表に消極的な児童が少なくない。そこで，より意欲的に発表させるための手だてとして「発表温度計」と名付けた教具を準備した。この教具を児童一人一人に持たせ，「１回の発表につき１度温度が上がる」というルールで発表させた。授業での活用は以下の通りである。

・導入の場面では意図的に全員に，また補助発問については列や班を指名して発表させる。
・中心発問についてはワークシートに書いてあることを基に，隣同士，班，全体の順で発表させる。
・振り返りの場面では，列や班を指名して発表させる。

発表温度計を使うことにより自分の発表の伸びが自覚でき，より意欲的に発表に関わることによって自他の意見を認め合う心情が育まれるものと考える。

３　検証方法

⑴ アンケートによる自尊感情の意識の測定

自尊感情についての意識の測定をするために，単元の始めと終わりに表３の内容でアンケートをとりそ

の変化を比較した。設問は「Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート」（以下Q-U とする）にあるものの中から，仲間意識と関わる自尊感情についての５項目を選んだ。

表３　設問の内容

1	クラスの仲間だと思われていますか。
2	できなかったことができるようになるとうれしいですか。
3	勉強ができるように努力していますか。
4	仲間は失敗しても励ましてくれますか。
5	気持ちを分かってくれる友達がいますか。

(2) ワークシートによる他者理解の質の測定

他者理解の質の変容を測定するために，ワークシートに使われている言葉を比較する。相手の気持ちを「考える」等の言葉で表現していれば「他者理解をしている」と判断した。一方「～してあげる」という言葉で表現していれば「他者理解をしていない」と判断した。

(3) 体験日記による自尊感情の質の測定

自尊感情の質は，体験日記の内容を測定した。「ボランティア活動の様子」「気付いたこと」に着目し次の四つに分類した。「褒められることを期待することではないことに気付いている」ものをＡ，「誰かのためになる活動を進んで行っている自分に気付いている」ものをＢ，「今の自分でも役に立つことはたくさんあることに気付いている」ものをＣ，「上記の三つに気付いていない・意味が不明確」なものをＤとした。そのうちのＡ，Ｂ，Ｃを自尊感情に関わるものと捉えることとした。

(4) 話合い活動における表現意欲の測定

単元後に発表温度計の度数を測定し，発表温度計のない授業（単元前）との違いを比較した。また，ワークシートを活用した話合いでの児童の発表内容に着目した。さらに，隣同士，班，全体での話合いにおける児童の様子を観察した。

4　考察

(1) ボランティア活動の効果について

ア　アンケートにおける自尊感情の意識の変化

図１のように単元の前後でとったアンケートでは，５項目全てにおいて意識の高まりが見られた。特に「クラスの仲間だと思われている」という項目での意識の高まりが顕著であった。つまり，児童の心の通い合いが促され，互いに認め合う集団づくりが進んだと言える。ボランティア活動を共有し互いに支え合い励まし合いながら活動したことが要因として考えられる。

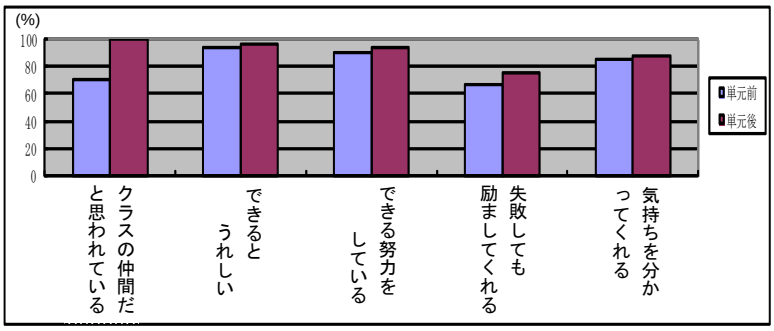

図１　自尊感情の意識の変化

イ　体験日記における気付きの質

体験日記の内容を分類した結果，気付きの内訳は表４のようになった。Ａ，Ｂ，Ｃの気付きを自尊感情に関わるものと捉え集計すると，33人中28人の児童（85%）が該当した。つまり，児童はボランティア活動の自発性，無償性，公共性という価値に気付いたと言える。この活動によって達成感を伴った自己有用感を味わい，自分のよさに気付いたことが要因として考えられる。

表４　体験日記によるボランティア活動での気付きの内訳

内　　容	人数（人）	割合（%）
Ａ　褒められることを期待することではないことに気付いている	3	9
Ｂ　誰かのためになる活動を進んで行っている自分に気付いている	13	40
Ｃ　今の自分でも役立つことはたくさんあることに気付いている	12	36
Ｄ　上記の三つに気付いていない・意味が不明確	5	15

また，Ａ，Ｂ，Ｃの内容を詳しく分析した結果，そのいずれにも，仲間と一緒に活動することで今の自分にできることに気付いている要素が含まれていた。このことからも，自己有用感を味わい，自分のよさを認めていることが分かる。具体的には以下のような体験日記が書かれた。

Ａ　褒められることを期待することではないことに気付いている例　～児童Ｅの作文～
　　トイレは自分でも使っているので，くさかったりうんちが残っていたりするときもあるけど，

みんながちょっとずつみがけばきれいになります。こういうことは当たり前だと思います。
B　誰かのためになる活動を進んで行っている自分に気付いている例　～児童Ｆの作文～ トイレみがきでは便器のよごれがとれるように力強くみがくことができました。１日目より２日目，２日目より３日目というようにどんどんきれいになっていったのでやってよかったと思います。また地いきのごみ拾い活動では，わりときたない物ばかりが落ちていたけど，がまんして拾うことができました。どうしてたくさんごみを捨てる人がいるのかなと考えました。少しでもトイレや地いきがきれいになったような気がするから，続けてやる自分が好きです。
C　今の自分でも役に立つことはたくさんあることに気付いている例　～児童Ｇの作文～ トイレのにおいがくさかったです。でも，きれいになるようにみがきました。きれいなったらにおいもよくなりました。トイレみがきは意外にかんたんです。１日５分やっていけばいいと思います。この活動で自分はこんなにできるんだ，こんなことをよくがんばったなと思いました。

これらにより，ボランティア活動を通して自尊感情が高まったと考えられる。

(2) 自作資料の効果について

ア　他者理解の意識の変化と質

副読本の資料と自作資料をそれぞれ活用した場合の他者理解の意識の違いは図２のようになった。副読本では「～してあげる」と書いた児童（他者理解をしていない児童）が33人中28人だった。しかし自作資料では「相手の気持ちを考えること」等と書いた児童（他者理解をしている児童）が33人中33人だった。つまり，自作資料によって他者理解が深まったと言える。自作資料の主人公である「ぼく」に同化することによって思いやりの意味を一緒に考えられたことが要因として考えられる。

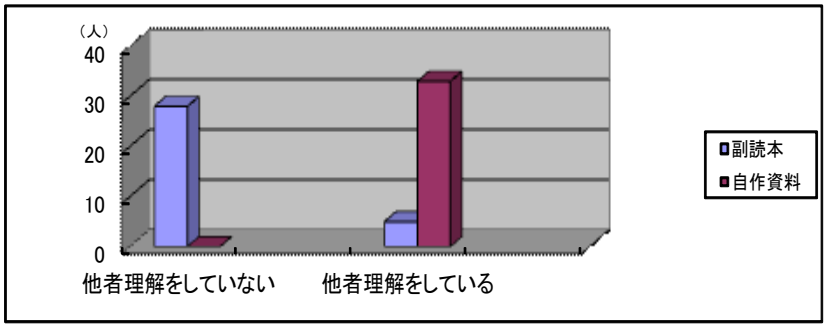

図２　他者理解の意識の変化

イ　抽出児童の様子

相手の立場を理解しようとしている例　～児童Ｈの作文～ 思いやりとは人に～してあげることだけではなく，相手の気持ちを考えることだと思います。この学習を生かして自分のことだけではなく，もっともっと相手の気持ちを考え思いやりの輪を広げていきたいです。
相手の気持ちを共有しようとしている例　～児童Ｉの作文～ 前までは思いやりは人に～してあげることと考えていたけれど，本当の思いやりとは相手の気持ちを分かち合うこと。相手が悲しんでいたら悲しみを分かち合えば一人でその悲しみを背負わなくてもいい。喜びもみんなで分かち合えば倍になっていくから。

Ｈ児はQ-U の結果では要支援群に属していた。しかし，自作資料を通して改めて自分と周囲との関わりを見つめ直し，思いやることの意味や必要性を感じるようになっている。

(3) 小集団を活用した話合い活動の効果について

発表温度計の度数を発表回数として，話合い活動における表現意欲の量を測定したところ表５，表６から分かるように，単元前には発表回数０回が11人に対し単元後には９人減となり，一人当たりの発表平均回数は３回から６回へと増えた。また，発表回数が増えた児童の発表内容に着目すると，ワークシートに書かれている内容が中心であった。さらに，単元前において発表回数０回から３回までだった児童の様子を観察した結果，隣同士や班で発表した内容が全体の場でも発表されていた。つまり，段階を踏んだ小集団での話合い活動により，表現意欲が高まったと言える。その要因として次の５点が考えられる。

表５　発表回数の人数の変化

発表回数（回）	単元前（人）	単元後（人）
0	11	2
1	5	1
2	4	6
3	7	7
4	0	3
5	1	3
6	1	1
7	0	0
8	0	1
9	0	0
10以上	4	9

・ワークシートの形式を，キーワードを使ったり穴埋め式にしたりしたことで，自分の考えが書きやすく

なったこと。
・ワークシートに書いたことを読むことで発表しやすくなったこと。
・小集団での話合い活動によって，発表することに抵抗を感じることが少なくなったこと。
・互いの発表を聞き合うことで，自分の考えを肯定的に受け止められるようになったこと。
・発表温度計によって発表意欲が高まったこと。

表６　一人当たりの平均発表回数の変化

	単元前（回）	単元後（回）
平均発表回数	３	６

Ⅴ　研究のまとめ

１　ボランティア活動による自尊感情の意識の変化

ボランティア活動が自発的な行為を促し他者への思いやりという価値を仲間とともに共有できること，また，児童が達成感を伴った自己有用感を味わい自尊感情に結び付くということが確かめられた。

２　自作資料による他者理解の意識の変化

自作資料が，相手の「気持ちになって考えてあげる」ということだけではなく，相手の気持ちを知って改めて「思いやる」ということに向き合ったことで，他者理解の捉えを変えていることが分かった。

３　小集団による話合い活動の変化

小集団から徐々に全体へと段階を踏むことと話合い活動に書く場を設けることが，児童の安心した発表につながること，また，発表回数の伸びを自覚できる手法が表現意欲を高めることが分かった。

Ⅵ　本研究における課題

・自尊感情を高めるための要素の吟味，要素相互の関連性の検討が必要である。また，見通しをもった年間計画の作成が求められる。
・自作資料は客観的な価値が存在するか検討する必要がある。また，イラストや写真，実物，録音，ＶＴＲなど視聴覚的な資料の活用・開発も意義があると思われる。
・話合い活動については，書かせるタイミングや時間の確保を工夫するだけではなく全教科と関連させながら指導する必要がある。また，発表意欲を喚起する話し合わせ方の工夫をして習慣化を図る必要がある。

＜引用文献＞
諸富祥彦　2011　『ほんものの（自己肯定感）を育てる道徳授業』，pp. 13-15 ，明治図書
文部科学省　2008　『小学校学習指導要領（平成20年３月告示）』，p.106

＜引用ＵＲＬ＞
中央教育審議会　2008　「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf(2011.12.27)

＜参考文献＞
小川信夫編　2011　『平成23年度版　きみがいちばんひかるとき　４年』　光村図書
河村茂雄　2011　『Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート』　図書文化

＜参考ＵＲＬ＞
東久留米市立久留米中学校　平成22年度　『自尊感情や自己肯定感を高める指導の工夫』
http://members2.jcom.home.ne.jp/kuru-j/h22/tokusyoku/H22.jison-kenkyu/H22.jison-kenkyuhokoku.pdf (2011.12.27)